図書館の本棚から(一般)

2016 年 11・12 月号　亀山市立図書

●メビウスの守護者　　川瀬七緒

東京都西多摩で、男性のバラバラ死体が発見される。捜査会議で、司法解剖医が出した死亡推定月日に、法医昆虫学者の赤堀涼子が異を唱えるが否定される。なぜ遺体の死後経過と「虫の知らせ」が一致しないのか…。

○自信のない部屋へようこそ　　雨宮まみ

「いつか、あんな部屋に住みたい!」の「いつか」っていつ? 1K 以上の部屋に住んだことがないひとり暮らし歴 20 年のライター・雨宮まみが贈る等身大の暮らしエッセイ。

●この世にたやすい仕事はない　　津村記久子

どんな仕事にも外からははかりしれない、ちょっと不思議な未知の世界があって…。1 年で、5 つの異なる仕事を、まるで惑星を旅するように巡っていく連作小説。

○やめてみた。　　わたなべぽん

炊飯器、スマートフォン、もやもや人間関係…。思い切って“やめてみる生活”をはじめた著者が、試行錯誤を繰り返しながらも少しずつ生きるのが楽になっていく様子を描いたコミックエッセイ。

●ふちなしのかがみ　　辻村深月

おまじないや占い、だれもが知っていた「花子さん」。夢中で話した「学校の七不思議」、おそるおそる試した「コックリさん」。やくそくをやぶったひとは、だぁれ? 青春ミステリの気鋭が初めて封印を破った現代の怪談!

○こんなときのどうする絵辞典　　ニシワキタダシ

目のやり場に困るとき、着ていた服がやぶれていたとき、わけもなく悲しいとき…。日常の少し困るシチュエーションとその解決案を、前向きにおもしろくとらえて描いた絵辞典。エッセイも収録。

●また、同じ夢を見ていた　　住野よる

学校に友達がいない“私”が出会ったのは、手首に傷がある“南さん”、とても格好いい“アバズレさん”、一人暮らしの“おばあちゃん”、そして尻尾の短い“彼女”だった―。「やり直したい」ことがある、全ての人に贈る物語。

○摩訶不思議な棋士の脳　　先崎学

張りつめた対局室の空気も、次の攻撃の前には、ひとたまりもなかった。その攻撃とは…。プロ棋士・先崎九段が描く痛快将棋エッセイ。

●片桐大三郎とＸＹＺの悲劇　　倉知淳

聴覚を失ったことをきっかけに引退した時代劇の大スター、片桐大三郎。古希を過ぎても聴力以外は元気極まりない大三郎は、その知名度を利用して探偵趣味に邁進する。彼の「耳」を務める野々瀬乃枝は文句を言いつつあとを追う！

○まにまに　　西加奈子

嬉しくても悲しくても感動しても頭にきても泣けるという、喜怒哀楽に満ちた日常、愛する音楽・本への尽きない思い…。「サラバ!」で多くの人に“信じる勇気”を与えた西加奈子の６年分のエッセイがギュッと詰まった一冊。